

講演Ⅰ 自然 NATURE

「うつしみ」と「いつくしみ」

——文化継承と再編への軌跡 戦後七十年と自然の営み——

稲賀繁美

はじめに

ご紹介いただきました稲賀と申します。本日は、「うつしみ」と「いつくしみ」を演題といたしました。我々は何を二十世紀日本の文化遺産として後世に残すことができるか。戦後七十年を迎えました。それは最後の生き証人の方たちが人生を終えようとする時代を迎えているという点でもあります。我々の世代は、今後この経験をどのようにして次世代に伝えていくべきか。これはたいへん大きな問題です。

遺産を残す、と我々は申しますが、それはそもそもどのような営みでしょうか。そんな問題を提起させていただき、後ほど会場の皆様のお考えもお伺いできればと思います。

最初に、ひとつの比喩から始めたいと思います。可視の世界と不可視の世界についての話題です。見えるか見えないかの前に、聞こえるか聞こえないか、について考えてみ

ましょう。ジャワにガムランという音楽があります。

ガムランとは、金管・木竹管などからなる楽器での合奏です。十八世紀、ヨーロッパで交響楽が成立するのとはほぼ同じ時期に、ジャワを中心に発達した宮廷音楽ですが、同時に農村共同体の音楽でもあります。村中の老若男女が集って演奏することになります。

ガムランの楽器は面白い特性を持っています。鈴のような音色ですが、それには我々の耳で聞こえる可聴域以外の音、直接に鼓膜では聞きとれない音が非常に豊かに含まれているそうです。その聞こえない音は、例えばヨーロッパの楽器ですと、ヴァイオリンにしてもピアノにしても、極めて少ないように設計や調律がなされている。

このガムランを演奏していると、とても心地が良い。そのことを土地の方々は経験的に知っていた。その心地よさという効果がどこから生じているかについて、京大の医学部が実験しました。まず、CDに録音した曲はどうか。残念ながらこれはほとんど効果がなかったのだそうです。というのも、CDというのは可聴域、耳に聞こえる部分だけを人工的に拾い上げて録音するため、ガムランのガムランたる所以である聞こえない音は落ちてしまっているわけです。つまり超音波の部分です。

では、その超音波の部分だけを聞かせてみたら心地よく

なるだろうか。これも実験したようですが、効果はなかった。結局、メカニズムはまだよく分かりませんが、聞こえる部分と聞こえない部分、両方を含んだ音を聞かせると、そこで初めて我々の脳は喜ぶらしい。喜ぶとはどういう意味かといえば、一種の快楽物質が出てくる。アルファ波がたぐさん出る。例えば瞑想や読経、歌を歌っている時の脳波に近いということが分かってきたのだそうです。

このお話を最初にした理由は、我々は音楽というところ、耳に聞こえるものを聴いている、という前提に立ちます。ところが、実際は聴いていないつもりのも音も我々の体に響いている。そして、それが何らかの影響を及ぼしている。

では、見える世界はどうでしょう。我々に色彩として見える世界、つまり肉眼で経験できる世界は、赤外線と紫外線の間の波長にある世界です。例えばサファリアパーク等に行きますと、夜は赤外線の色が見えます。すると日中では見えない動物たちの姿が見える。赤外線は熱線ですから、目には見えませんが、実は肌や手で温かさとして感じています。紫外線についても、ブラックライトという照明を当てると肉眼でも見ることが出来ます。このライトで照らしてみると、普段は光ってないと思っていた鉱石が実は光を発しているということが分かってくる。

これらのことは、我々が肉眼で常識的に見えていると思っ

継がれていくと申しました。この「継ぐ」ということと「償う」ということ。これが普段意識してはいませんが、日本語では極めて近い関係にあるようなのです。

我々は何かを失ってしまった。その失われたものを取り返したい。それが補償ということですね。それが償い（つぐない）であるならば、償いの前提にある「継ぐ」という行為もまた何かを喪失している。例えば財産を継承するといいますが、この場合、全てを先祖からいただくことではできません。我々はそこで何かを選び取る。しかし、同時に何かを見捨てざるを得ない。その裏表のなかで初めて前の世代の経験を継ぐことができる。

つまり継ぐという行為には実は喪失が含まれているわけです。継承するということは、除外する、捨てるという行為と裏腹です。私はこの観点から、文化遺産を含めたヘリテージ・マネージメントについて、もう一度考えなおす必要があるのでないかと考えています。

知識についても同じです。大学時代、有名な先生が素晴らしい講義をされたということは覚えていますが、ではあの先生は何を話していたかということになると、我々はその内容はほぼ忘れてしまっている。実は伝えられた知識は、その八〇%か九〇%は途中で落下して失われているのだといえます。

ている世界の外側に、実は見えていないけれども実在する世界があることを示しています。その世界にまで少し視野を広げてみるのも面白いのではないか。これはあくまで比喩として申し上げますけれども、これを出発点にいたしましょう。

「継ぐ」と「償う」こと

本年一月、ヨーロッパでヘリテージ・マネージメントに関する学会が開かれました。人間の知識というのは一つの世代から次の世代へ、一つの文化圏からそれ以外の文化圏へと伝えられていきます。しかし、そこで一体何が伝わっているのか、伝えるとはどういうことか。我々が遺産として認識するものとは一体どのような働きで受け継がれているのか。そのようなことを議論したのですが、その場では私が提案したことを本日の導入としてまずご紹介したいと思います。

遺産という日本語は、英語ではヘリテージとかインヘリタンスにあたりますが、しかしこれらの言葉が日本語の補償、コンペンセーションと関連付けて吟味されることはヨーロッパでは稀です。漢語でも両者に直接の関係はありません。ところが和語では両者は密接につながっている。

遺産とは、世代から世代へ、文化圏から文化圏へと受け継がれます。そうしますと先程の言い換えになりますが、喪失とはむしろ遺産管理の前提である。文化の継承というなら、そこで一体何が失われるのかということをもっと計算しておく必要があるのではないかと。少しややこしいことを申しましたが、本日提案申し上げたいのが、このことです。

例えばユネスコが採択する「世界遺産」がありますが、遺産に選ばれるということは、そこから選り損ねられ、忘れられていくものが当然あるわけです。何が残すに値し、何が残すに値しないのか。では、残すとはそもそもどのような行為なのか。

捨てることと捨てること。この必然的な営みの意味をしばらく皆様とともに考えてみたいと思います。

本年一月には、ヘリテージ・マネージメントの学会とは別に、「うつわ」と「うつし」をテーマにした陶磁器の展示とシンポジウムを企画し、パリ日本文化会館で開催しました。

「うつす」という言葉。英語ではトランスファーという他動詞にあたります。これに対して「うつる」は自動詞です。ところで、自動詞を英語ではイントランジティブといいますが、不思議なことに英語圏、ヨーロッパ語圏だと、他動詞のトランジティブがベースで、それにインをつけてひっくり返したものが自動詞となります。ところが日本語

はどうでしょう。自動詞の「うつる」の方がむしろ母体で、それを使役になると「うつす」になる。

また我々は「うつす」という言葉を実は大変広い意味で使っています。英語でこれを全てカバーする言葉はまずありません。いろいろな漢字を当てて使い分けていますが、それらは逆に日本語の「うつる」「うつす」という言葉では一体のモノとして捉えられていた、ということになるでしょう。

それから、「うつく」という言葉もありまして「うつけもの」などといいますね。これは頭の中が空っぽだということから、ちよっとおつむが足りないのじゃないかという表現で使います。

今日の二つ目のターム「うつしみ」もこの議論に連なります。「うつしよ」というのは、いま現にこの我々がここにいるという意味です。現世ですね。ところが、これが日本の中世になりますと、『源氏物語』にも光源氏から逃げてしまう女性に空蟬うつせみという名前がつけられています。つまり、行ってみたらぬけの殻だったという意味です。ここには一種の無常観が色濃く影を落としています。

『古今和歌集』に「空蟬の殻は木ごとにとむれど魂のゆくへを見ぬぞかなしき」という歌があります。これはセミの脱け殻です。そこにセミがいたはずだけでも、今はありません。そうすると、大切に思い、心をかけるという意味と、宗教的にそのものが大切だと思ふ気持ちがあるところにこめられています。ところが、少し時代が下ると、何か心が居つく、執着のようなことも「いつく」と表現するようになります。一種の憑依現象ですね。誰かを愛してしまふと、そこに執着が生まれる。それは相手に対する敬意でもあるけれど、相手を所有したいという欲望にも結びつく。「いつくしみ」という言葉には、そうした相反する価値が閉じ込められているように思われます。

広島——知識の移転、あるいは喪失の目撃者

ここからは敗戦後七十年ということで、少し深刻な話をさせていただきます。この会場にも戦争の末期にご家族が命を落とされたという方がたくさんいらっしゃると思っています。私は広島出身です。例えば原爆についても、当時二十歳であった方は九十歳をお迎えになる。そうしますといずれ遠からず、幼少時にかすかにその体験をお持ちの方も、この世からはいらつしやらなくなるでしょう【図1】。

今では、広島はカタカナやアルファベットでもその名を世界で知られる言葉になりました。再統一がなったベルリンに、ボンに移っていた日本大使館が戻ってきました。場所は戦前に日本の大使館があったところの近くです。その

空っぽになっていく。人間でいえば体は残っているけれど、そこにあったはずの魂はどこかへ行ってしまった。

つまり、「うつせみ」には、「うつしよ」としての現世と、空っぽの抜け殻の空蟬という相対する観念が、実は中世以来色濃く落ちていて、我々は普段の生活でもそういう言葉からなんらかの影響を受けているわけです。

「うつる」とか「うつろい」とか言います。これは場所が移動していく、時代が変わっていく、そのなかを我々は流されていくんだという一種の儚さと密接に結びついています。そういえば、皆さんもたくさんさんの和歌が記憶から浮かんでくるのではないのでしょうか。

「うつわ」というのは、語源ははっきりしないようですが、古語なら空うつろな葉、現代語なら、うつろな輪っばといったイメージを我々は抱いているようです。

本日はもう一つ「いつく」という言葉、「いつくしみ」というタームを挙げました。実はこれを英語に訳すのは簡単ではありません。時代によっても違いますが、一つは宗教的な意味があります。神社などでご先祖の霊に働きかけるときに、それに先立って自分の身を清める。そういう場合、「いつき」と申します。同時に、何か自分の愛するものをとても大切にします。たとえばかくや姫をおじいさんが大切に慈しむ。この場合、「いつく」という言葉が使われ

大使館にちなんでつけられた通りの名前が、ピロジマ・シュトラッセ、ヒロシマ通りです。そこは、戦前の大使館が、ドイツ、イタリア軍事同盟を結んでいた日本の出先機関でもあったという記憶を濃厚に留めている場所でもあります。

広島原爆資料館には、被爆された方の影だけが残ったという有名な石段の展示があります。先ほど原爆を目撃した方、体験した方々がほほ地上から消えようとしていると申し上げました。ただ、これは正確ではありません。この影だけが残った被爆者は、まず瞬間に網膜がやられてしま

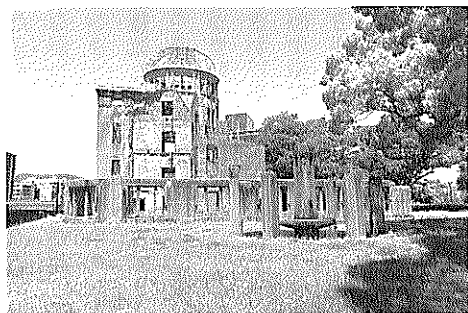


図1 広島原爆ドーム

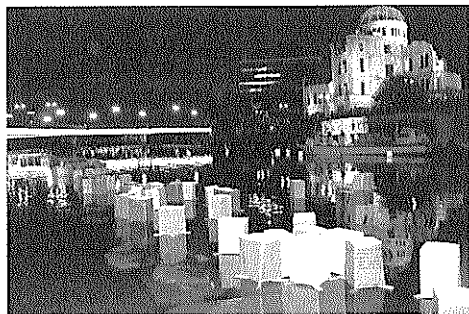


図2 広島、灯籠流し。8月6日夜

ているところは「原爆の図」を描いた丸木位里、俊夫妻。原爆当時三十歳ちよつとだった幾多の被爆者も、その三十年後に、晩年を迎えて初めて自分の体験を絵に残しています。

彼らは、とくに俊さんは爆弾が落ちて数日後に広島に入ったわけですが、すべてを自分の目でご覧になったわけではありません。ただ、川に水を求めて入った人達がそこで亡くなり、大量の死体で川がせき止められたようになっていたということは多くの証言があります。とてもそのすべてを絵に描くことはできませんが、その一部分の断片だけでも、伝えるのが、我々によりやくできることではないのか。

今、亡くなりつある高齢の被爆者の方々の声を次世代に引き継ぐため、いかに若い人達に伝えるかということが課題になっています。私はそうした営みがきわめて大切だということとは重々承知していますが、そこには同時にある危うさがあると思っています。それが今申し上げたことです。つまり、知識として移すことができるものは、移すことによつて生じる損失、ないしは喪失、その副産物にすぎないのではないか。そして、免れがたい喪失があるのだという認識。そこまでは皆様と共有できたかと思えます。

それでは、人類の遺産ということを一般的に考えたとして、それは何なのか。結局それは我々にとつて贖いえないものを、そうとはわかつているが、それでも贖おうとしてもがいている我々の努力。償えないということはわかっているけれども、それでも償おうとする我々の、つまり残された人間達の必然の闘いである。少しベシミスティックに聞こえるかもしれませんが、知識を伝えるということには、初期条件としてこのような困難が伴っている。それはなにも戦争体験だけに限らないと思っております。

けでも膨大な数の絵になった。そのことが逆に、描かれなかった、そして描きようがなかった「こと」の重大さというものを伝えてもいます。

その一方で、広島では灯籠流しがずっと行われてきました。八月六日に原爆が落とされ、日本の敗戦が十五日。ちよつとお盆の季節に重なっていた。広島は六本の川のデルタの上に存在しています。その川で魂をもう一度送り出す祭礼が、慰霊のための年中行事の習わしになったことは、皆さんもよくご存知だと思います【図2】。

我々が持っている知識や経験、そして思い出といったものが、これらをどのようにトランスファー、移していくことができるか。原爆の例でいえば、実は目撃者であったはずの人というのは目撃証言をする能力すら奪われている。また、一つの世代から次の世代へ伝わるものとは、先ほどの石段の人影のようなもの。その人はもういなくて、我々はなくなつてしまった方の影をかりうじて伝えることができただけなのかもしれない。それだけでも大切なことですが、しかしそれは影でしかないのだということは、我々は覚悟しておいてよいのではないのでしょうか。

これは原爆に限ったことではありません。

としますと、知識の移転によつて雄弁にも、あるいは残酷にも示されるものは何か。いってみれば、「移し」という「ミリンダ王の問い」という有名な伝典があります。これは紀元前二世紀に、インドに遠征したアレクサンドロス大王の末裔にあたるギリシャ朝の王様とインドの比丘が問答をした記録です。比丘が王に、そこに松明の炎が燃えているという話をします。この炎は果たして昨日あなたが見ていた炎と同じですかと。燃えているということでももちろん同じ炎です。ですが、それが同じものと言えるかといえば、そこで燃えている燃焼物、燃料は、昨日と今日では異なる。つまり、炎という姿は同じだけれども、その炎を構成する材料は昨日のものとは違つてしまつています。

なぜ我々はひとつの炎をこれだけ大切にするのか。広島は平和記念公園の前にも、消してはならない炎があります。これは核兵器が廃絶された時に初めて消すことができるという。その炎は、比喩としていえば、我々一人一人が次の世代に伝えていくべきものですが、それをリレーしていく我々は自分たちの寿命がくれば、そこで消えていく。つまり、燃料としての我々はひとりひとり消えていくけれども、炎は後世に伝わるように。そうした願いがここに籠められていくということです【図3】。

先ほどの灯籠流しというのも、これと同じ営みでしょう。広島は太田川を下る灯籠には、我々が失つてしまった親族の魂が籠められています。それはその時その時で流れ

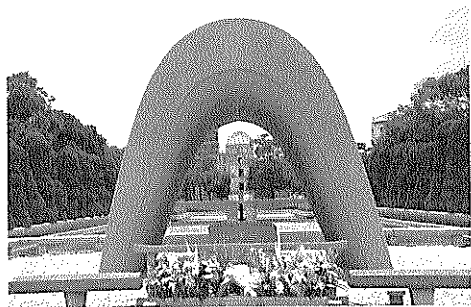


図3 広島、原爆慰霊碑ごしに「原爆ドーム」を臨む

まりにも有名な冒頭部は、実は同じ世界観を語っていたわけです。

「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。流みに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたる例なし。」

この「うたかた」もあの灯笼も、本当に一夜にして消えていく。それは我々一人一人の人生と同じです。それでも毎年毎年流すという営みのなかで、我々の生命は大きな意味で次の世代へとつながっていく。ここにはそういう悟りが託されてもいます。

れている。そういう場所として、この空き地はきわめて大きな意味をもっている。この空き地ゆえに我々は次の世代へと、いまある「うつしみ」を伝えることができる。お伊勢さんでは、そのような仕組みが極めて賢明に仕組まれています。

先ほど炎のたとえを申しました。伊勢神宮はもちろん炎ではありませんけれども、そうしたかたがたの継承を、ほぼ奇跡的と言ってもいいやり方で伝えている。そんな生きた建築であると言つてよいのではないのでしょうか。

例えば、七八五年に第六回目の遷宮が行われましたが、



図4 伊勢神宮、2013年の遷宮の航空写真 (共同通信社)

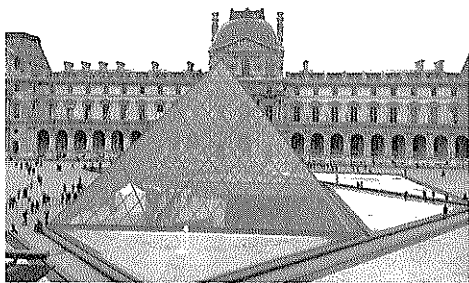


図5 パリ、ルーヴル美術館の中庭。I. M. ペイ設計のガラスのピラミッド

去っていく。しかし、その魂を流す川というものはずっとその場に留まっている。ここまですれば、日本の教育を受けた方は皆さんおわかりだと思います。今から八百年前に書かれた鴨長明の『方丈記』。そのあ

一つの世代が体験したものをどうやって次の世代に受け継いでいくか、それが極めて難しいことであることは承知したうえで話をしてみたい。ここからは、では伝統とは何かという問いに話を移そうと思います。

伊勢——形の生命とその継承

伝統という言葉には普段、「伝」えるに「統」という字を当てますね。それに対して天台宗などでは、「伝灯」と書きます。これはまさしく、ともしびを次の世代に伝えていく行為です。延暦寺の不滅の法灯のように、ともしびを灯す我々一人一人の命は短いけれども、それを次の世代に伝えていこうとする知恵があらわされている。

神道の場合はどうでしょうか。二〇一三年に遷宮があったお伊勢さんのことを考えれば、分かりやすいと思います。伊勢神宮では、二十年ごとに金座と米座とのあいだを神様が行き来します。新しい社殿が金座に建てば、もう一方は更地になります。この更地になってしまった古殿地と建物とのあいだの往還、行ったり来たりがきわめて重要だろうと思います【図4】。つまり、更地では、ここに起源としてあったはずのものがもうないのですよということが示されています。しかし、同時に二十年後にはここに次の世代がやってくるということもアナウンスされている。予告さ

これは、スペインのコルドバにあるモスクが創建されたのと同時代です。それから、一四六二年からの第四十回遷宮

伊勢神宮のお社は同世代と言つてもいい。二つのことが言えると思います。一方は六九〇年という日付から今に至るまで、毎回建て替えられてはいるけれども、ほぼ同じ形のもが今に至るまで継承されてきた。という意味ではたいへん古い建物である。と同時に、今見てきましたように、例えばコルドバのモスク、ロワール河のお城、そして最近のポスト・モダンの建物、それらと並んで最も新しい建物でもあり続けている。そういうものとして伊勢の形を我々は受け継いでいる。

もちろん、二十年ごとの建替えにも中断がありました。織田信長が寄進をして建て替えた時には、その前ほぼ百年にわたって遷宮が行われていなかったことが知られていません。ということは、その時の大工さん達は、図面もないところで、多分こうだったのだろうという推定から造り直さざるをえなかった。ここにもう一つ逆説が潜んでいると思います。つまり、物質的に連続していないからこそ、継がなくてはいけません。失われてしまったからこそ次の世代にもう一度再興しなくてはならない。多分そういう意思が、織田信長からお金を頂戴して再建に尽くした宮大工の中には強い志としてあったはずで、物理的な断絶がむしろ精神的な絆を強めてきた。そして、その結果として、我々は今の伊勢神宮の姿を目にしているのだと思います。

これも比喩になりますけれども、現代の生物学で一番面白いあたりといえば何か。それは他でもないDNAの二重螺旋です。そこでたくさん分子がやりとりをしながら次の世代をまたつくりあげていく。人体レベルの生命伝授の営みを、そうとは知らずに「造替」をとおして行っていた。それが伊勢神宮ではなかったか、という気もいたします。

こう言うと、ヨーロッパにも似たものがあるのでは、というご意見も出るかと思いますが、テーセウスのパラボックスという有名な話があります。

どポロポロの状態です。また、掘って立て柱ですから地面に直接建てます。すると、いくらいい槍を使っても二十年でその根本の部分は腐ってきます。そのことを経験的に知っていて、いわばメタボリズムを人智、人間の知恵でもって導き入れている。そういう制度として伊勢の遷宮があった。その限りで、これはテーセウスのパラボックス、つまりアンデンティティの危機という話とは随分異なるのではないかという気がしております。

このことは、実は文化財を継承するとか修復するという場合に、極めて大きな問題をはらんでいる。

その例として、フォンテーヌブローの庭園にある階段をご紹介します。これは十五世紀の立派な石段が残っている

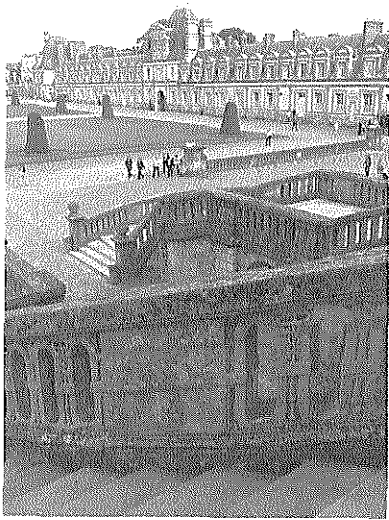


図6 フランス、フォンテーヌブロー宮殿。馬蹄形の階段（著者撮影）

テーセウスというのは、アテネからクレタ島に遠征にいった、ミノタウロスの住んでいたクノッソスの王宮にアリアドネの糸の導きで侵入し、見事に怪物を退治したというあの英雄です。その凱旋の船というのが、アテネの街に長らく祭られていたのだそうです。ところが、木の船ですから、だんだん傷みます。こっちの板がだめになった。それなら張り替えよう。あっちの帆柱がだめだ。ならばこれも替えよう。などやっつけていくうち、ふと気がつく。元の木材はどこにもなくなってしまった。フランスのある有名な考古学者と議論したのですが、彼はだから伊勢さんもこれと同じだと言うわけです。皆様、どう思われますか。

テーセウスの場合は修復の思想です。レストレーション。壊れてしまったからそこを直すということで、辻褄合わせをしているうちに元の材料がどこかに消えてしまった。これは結果論です。ところが伊勢さんの場合は、二十年で先手を打つわけです。壊れたからどうかしようではなくて、壊れるから先に壊してしまえと。すると、これは古くさくなる前に次のものを入れ換えてしまおうという発想です。

メタボリズムという言葉が、建築の世界でも六〇年代に流行りました。日本の木造建築は、普通の使い方をすれば二十年が限度というところがあります。特に茅葺きの屋根は、伊勢神宮の場合でも北向きのところは二十年でほとん

もので世界遺産になっています。ところが、そのお世話をしている大工さんに聞くと、大きな声では言えないけれど、実は元の石材は三〇%も残っていないのだそうです【図6】。ヨーロッパの場合は石造りですから、オリジナルの材料が生き残っている。だからユネスコの文化遺産に登録をされる。建前はそうですが、実際にはテーセウスの船と同じことが起こっているわけです。

伊勢神宮は、ユネスコの世界遺産になっていない。これはご存じの通りです。ですが、これは全く違う理由からなのです。

端的に言いますと、お伊勢さんの場合は宗教施設としていまでも生きています。生きています限り、世界遺産にはなれない。そう言うところがと語弊があるかもしれませんが、それに近いロジックが働いています。ということは、逆にいうと、もう死んでしまった建築物でなければ世界遺産にならない。そういうパラボックス、背理が、実は文化遺産をめぐる施策には隠されています。

そこまで言うと、いや、パリのノートルダムがあるではないかという声が聞こえてくるかもしれません。しかしノートルダムの場合も、生きてるのは毎日のミサにいらっしやる会衆とその時あそこでミサを奏でるオルガンだけではないのか【図7】。建築そのものは、十二世紀半ばで

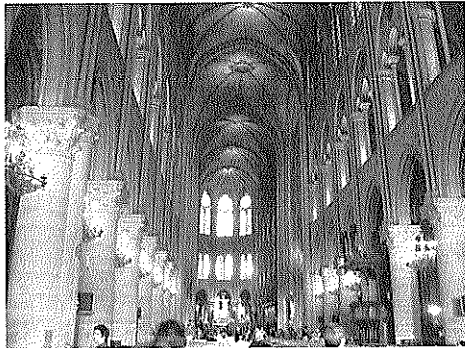


図7 バリ、ノートルダム大聖堂の内陣

ある。ちよつと乱暴な物言いですが、修復の思想とは、煎じ詰めれば死体保存です。

では、逆に我々の遺産を屍ではないものとして受け継ぐということはどういうことか。その話を少し申し上げたいので、結論に移りたいと思います。

これまでご紹介した伊勢の建築に関するさまざまな学説や意見―その多くは、ヨーロッパの学者達から披露されたものです。皆様が一番ご存知なのはブルーノ・タウトでしょう。一九三三年に来日し、翌年に伊勢を訪ねています。彼はバルテノンと伊勢とを比べています。そこで彼が

人がいると私は聞いたことがある」という表現で、自分が言つたとは書きません(笑)。

ただ、これは一面の真理でもあります。当時も今もですが、社殿に入ることはできませんし、そこに何があるのか我々は知らない。そして、ヨーロッパのお城にあるような絵も彫刻も、何もない。つまり、空っぽで隠すべきものも何もない「入れ物」だけがそこにある。にも関わらず、それが国民の統合の象徴になっている。

ポスト・モダンの時代を迎えますと、もう亡くなつてしまいました。がジャン・ボードリヤールという人が、「オリジナリティなきシミュラクル」ということをいいます。別にボードリヤールは伊勢のことを論じたわけではありませんが、伊勢もオリジナルであつたはずのものがない。その不在ゆえに、その似姿が反復してつくられていくという。いわばポスト・モダンの決まり文句が当て嵌まる。

不思議なことに、伊勢はポスト・モダン以前からポスト・モダンを実践していた。さらに、お伊勢さんの場合、壊れるから直すのではなく、壊れる前に自分で壊す。アレクサンドル・コジェーヴという有名なヘーゲル学者がいました。彼がこんなことを言っています。日本の美学とは純粹なスノビズムにあり、そこでは全く無償に自殺を遂げることができる。

言っていることは、今私が話したことにきわめて近い。

どちらもとても立派な建築だ。彼は言っています。しかし、バルテノンの場合は遺跡である。これはもう死んでしまつていて。最初の用途は今では生きていない。他方、伊勢は今に至るまで生きた機能を保持していて、それが国民全体によって支えられている。そこに違いがあることを、タウトは鋭く指摘しました。

ついにながら言っておくと、それ以前は伊勢のあんな掘つ立て小屋は「建築」とは呼べないだろうという見方が圧倒的で、日本の学者も建築史に神社建築は入れていなかったほどです。ところが、タウトのような人物が評価し、勿論その時には日本側も準備はできていたわけですが、これは大変なことだという認識が広がる。

ここで他のヨーロッパの学者たちが伊勢に対してどのような意見を述べたかということも、簡単に見ていきたいと思ひます。

有名な人物としてバジル・ホール・チェンバレン。日本で帝国大学に雇われていた言語の専門家です。彼はこんなことを言っています。伊勢神宮には別に見るものは何も存在しない。そして、日本人どもはそれを外国から来た旅行者たちに見せてくれようと思ひしない。勿論、チェンバレンさんはなかなか賢い人ですから、「ということを言った

これは我々には違和感のある表現かもしれませんが。しかし、たしかに言われてみれば、伊勢神宮というものはなんのわだかまりもなく、自らを自らで殺していく、それは「純粹なるスノビズム」の典型であつたのかもしれない。

コジェーヴも伊勢をことさら論じたわけではありません。とはいえ彼らの言説はいずれも、日本文化あるいはお伊勢さんという一つの現象をなんとか理解しようという苦勞から生まれたものとして、傾聴に値するでしょう。

それを踏まえた上で、一人の哲学者の話をしたと思ひます。九鬼周造。九鬼という人は一九二八年に十年以上にわたるヨーロッパ滞在から戻ってきます。その帰国の直前に彼はボンティニーというところで二つのフランス語での講演をしております。その時話題になつたのが、ギリシャのシジフォスの神話です。シジフォスは神から罰を受けて、谷底に石を拾いに行き、それを山の上まで持ち上げる。しかし、苦勞して山の上まで持ち上げたその石は、無償にもまた谷底へと転げ落ちていく。それを永遠に繰り返さなくてはいけない。そういう劫罰を受けた人。そのシジフォスについて九鬼周造はきわめておもしろいことを言っています。

九鬼は、シジフォスに地獄の劫罰を見た。しかし、彼はこうも言います。繰り返して岩を山の上に運び上げるとい

當みは、果たして徒勞に過ぎず、劫罰でしかないのか。いや、それはそうではない。九鬼によれば、常に岩の塊を押し上げようとするシジフォスは、確固たる意思で不満足を永遠に克服しようとしているのであり、この繰り返しのもののなかにシジフォスの幸福があるのだ、と言います。皆様、いかがでしょうか。ちよつと無茶じゃないのと思われ方も多いかと思ひます。では、どうして九鬼はこんな強情っぱりなことを、あえてフランスで言つたのか。

この講演を彼が行つたのは一九二八年です。その五年前に関東大震災がありました。この震災で、明治以来日本が築いてきた新たな帝都は灰燼に帰した。その地震の国で同胞達はまたぞろ地下鉄を作り始めた。馬鹿じゃないのかと、九鬼はヨーロッパの友達にさんざん擲論ちやくろんされたらしいのです。それに彼は反論しようとした。

百年ごとに大地震が来てすべては壊れてしまう。そんな場所になぜまたぞろ地下鉄をつくり直すのかということ、壊されたつて構わない。新たに取らるかということ、その意思こそが大切なのだと九鬼はいう。ちよつと強がりかなとも思えますけれども、地震国に生を受けた哲学者として、ヨーロッパの人たちに納得させるためにはこのロジックが必要だつたのだらうと思ひます。

しょうか。これではあまりに希望のない話ではないかと叱られそうです。

そこで、ここまで来た末のどんでん返しよろしく、一つの提案をして、お話しを締めくくりにさせて頂きます。

「うつしみ」の世界に我々は生きていくわけですが、その「うつしみ」の世界はやがて「うつせみ」、つまり空っぽの亡き骸になる。そして、この亡き骸という物質はどんな地表にたまり、死後の物質の世界へと沈澱を重ねていくことになりまふ。そこで失われてしまつたものは何かというと、それを我々はともすれば魂と呼びまふ。生きてい

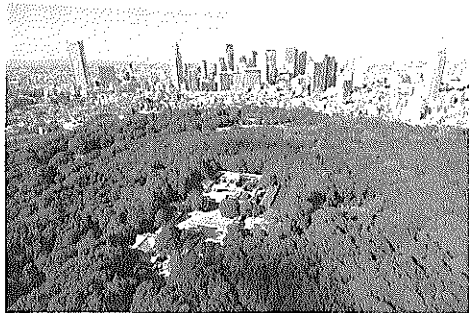


図8 明治神宮「代々木の柱」(明治神宮所蔵)

る人がもつていたはずの魂は失われてしまふ。それは我々には見えない世界にいつてしまひます。しかしながら、それは見えないだけで我々の心の中には生き残つていくわけだ。魂とは何かといえば、それは生命として死んでしまつた

おわりに

これまでいささか悲観的な話が多かつたという印象を皆様に与えたかもしれませぬ。しかし、もう一度確認したいと思ひます。つまり、知の伝達ということには、伝達できないもの、喪失という認識が背中合わせにある。そして、我々が後世に伝えるものは、実はその伝えることができなもののほんの裏側にしかすぎない。それは、我々ができれば伝達したいものだと思ふ内実の、空虚な残り滓だけののだろうか。これは私の問いです。我々に伝えることができるのは、伝えようと努力はしたが、それが失敗に終わったことを指し示す「喪失」の痕跡だけののだろうか。

このようなことを問うのはなぜか。それは、敗戦後七十年間でどのような教訓を日本が世界に伝え得たのかといえ、残念なことに一つは広島島の体験であり、その先には福島島の原発事故を上げる方がかなり多くいるからです。果たして我々は敗戦後七十年間、世界に残すべき遺産としてこれだけのものしかつくれなかつたのか。これは我々として深刻に考えるに値することだらうと思ひます。ベルリン市街のヒロシマ通りの隣に、今度はフクシマ通りができる日が来るのを待つことしか、我々にできることはないのだから、なおそこに残る「何か」なのだ定義しておけばいいのではないのでしょうか。

「いつくしみ」という言葉についてもお話しました。これもいつてみれば、もうそのものに接することはできない。その面影を我々は思ひ出すことしかできない。しかし、その手の届かない、目に見えないものを我々は「いつくしみ」ことができます。

実はきょう私は「明治神宮の自然」というお題を頂戴してまいりました。皆様ご存知のとおり、明治神宮の森は自然の森ではありません。人間の努力によつて営々としてなされた人造の森であつたということはよく知られてるところです。そして、その造営のために国民一人ひとりといつてもいいでしょう、大変な数の人々が動員され、自分たちの意思でこの森をつくらうとしたことも、よく知られていまふ。

今この森を空から撮影した写真を拝見すると、背景にある新宿の街並みとは、ある意味で文明の象徴、原子力発電所の処理に下手をすれば何十万年もかけなければならぬ、そのような文明の象徴であるのかもしれない。しかし、その傍らでいいますか、その中心に我々は残すべき森をつくつてきたと言ふこともできるでしょう【図8】。ここまでできますと、森を後世に残すという営みのなかに、明治

以来そろそろ百五十年になろうとする近代都市に生きる我々が大切にすべきものが見えてきたのではないか。

個々の命というものはやがて終わりを迎え、地球の生態系の営みの中に溶け込んでいく。しかし、その生態系の営みを微力ながら助けていくという営みのなかにこそ、人間の尊厳も培われてゆくのではないか。

生態系とは、地球の表面の本来に薄っぺらな部分で行われている営みです。大気圏というのは、地球を直径一メートルのボールにするならば、その上にほんの一ミリもありません。さらに地殻という地球の表層部もせいぜい厚さ十キロといえますから、六千キロという直径から比べた場合には、これもサッカーボールの革の厚さにもならない。そのきわめて脆弱にして薄っぺらな環境を、我々は生態系と呼んでいる。そこに我々は生かされている。このことを自覚させてくれる営みというのが、本日の二つのキーターム、「うつつしみ」と「いつくしみ」とから見えてくるのではないかと期待しております。

我々は「うつつしみ」として生かされていますが、遠からず虚ろな存在、「空蟬」となって消えていきます。しかし、そこに宿っていたはずの命、魂というものは、人知れず、次の世代の人たちの「いつくしみ」の対象になっていく。そして、それをいつくしんでいくという姿勢が、失われた

ものに対する我々のあるべき態度でもありません。

最後はいささか神学的な話になったかもしれませんが、ここでいったん話を区切らせていただき、皆様からのご意見を承りたく存じます。